特集2 解題

鈴木広と奥田道大の都市社会学と現在

Contribution of Hiroshi Suzuki and Michihiro Okuda to Current Urban Sociology

松尾浩一郎
Koichiro MATSUO

「鈴木広と奥田道大の都市社会学と現在」と題した特別セッションが持たれたのは、2016年9月3日の佛教大学紫野キャンパス、日本都市社会学会第34回大会においてであった。そこで展開された議論をもとにして編まれたのが本特集である。特別セッションにおいて登壇されたのは、報告者の田中重好氏と玉野和志氏、討論者の山下祐介氏と渡戸一郎氏の4人の方々であった。ここに収めたのは報告者のおふたりにご寄稿いただいた2本の論考である¹⁾。

特別セッションの、つまり本特集の主題となるのは、そのタイトルのとおり鈴木広と奥田道大というふたりの都市社会学者である。両者は長らく都市社会学界をリードする存在として活躍してきた。鈴木は1931年生まれ、奥田は1932年生まれとほぼ同世代であり、いずれも1950年代後半から研究活動を活発化させている。21世紀に至るまで質量とも傑出した業績を積み上げていった彼らの歩みは、ちょうど日本で都市社会学が興隆し定着していく過程と時期的に同期している。とくに、1982年に設立される日本都市社会学会においては、鈴木は設立当初から中心的な役割を果たし初代会長となっており、奥田も1991年から2期4年にわたって会長を務めるなどし、ともに学会の舵取りという重責を担っている。2014年に鈴木と奥田が相次いで帰らぬ旅に赴かれたのに際して、綿々と続く都市社会学の流れのなかに重要な区切りが打たれたと感じた者も、おそらく少なくなかったことであろう。2016年の大会で特別セッションが企画されたのも、そうしたリアクションのひとつに他ならない。

その経緯はさておき、このようにして鈴木と奥田を取り上げるのは、都市社会学の来し方を振り返ることでもある。しかし今このように都市社会学の歩み、学史に目を向けることには、果たしてどのような意義があるだろうか。というのも、これまで日本の都市社会学は——あるいは日本都市社会学会——折に触れて自らの過去を省みることを繰り返してきている。とくに日本都市社会学会という組織に限っていえば、34年間の歴史のなかで、学会誌において日本の都市社会学を回顧する特集を4回にわたって組んでおり、また、事実上それに近い内容となる特定の都市社会学者を主題にした特集がさらに2回あ

る。合計すると6回を数えることになる²⁾。これほどまで繰り返し取り上げられてきた日本都市社会学史を、今回この特集でさらに論じようとするのはいかなる意味を持つ試みなのだろうか。われわれはどのような意味を求めて鈴木と奥田が遺した仕事に向き合おうとすべきなのだろうか。3つ挙げたい。

まず第1に挙げたいのは、「都市社会学という「問い」」(町村 2013)の可能性を考えるための手掛かりとして、鈴木と奥田の研究は今なお大変に魅力的なものであり、われわれはそこから多くのものを学び得ると思われることである。

ふたりはいずれもその長い研究歴を通して、「都市社会学という「問い」」の可能性を押し広げ、深めていこうとした。具体的な研究関心は狭い意味での都市のみに限られることはなく、鈴木は宗教や福祉や環境や災害などへと、奥田はエスニシティやグローバリゼーション、さらにはエスノグラフィ論などへと議論を展開させていったが、その際にも「都市社会学という「問い」」はしっかりと保持されていた。時には都市社会学の制度的な枠組みを揺さぶったり越境していくこともあった。しかし、キャリアの後半期や晩年に至ってからも都市社会学そのものを問おうとする意欲的な論考を発表していることからわかるように(鈴木 1997、奥田 2009)、眼前の社会に対するアクチュアルな問題関心の追求と、都市社会学へのこだわりを両立させ続けたことは、彼らの学問の真髄のひとつとなっているといえるだろう。

そもそも都市社会学が学史をしばしば振り返ってきたのは、都市をめぐる激しく急速な社会変容のなかで、「都市社会学という「問い」」の意味が揺らいでいるからでなかっただろうか。都市や都市社会や都市的なものを問おうとするとき、都市社会学という問いの立て方にはいかなる可能性があるのだろうか。こうした疑問の背後には、都市社会学とはいったい何なのかという問いも見え隠れしてくる。鈴木と奥田はこうした問いに対して、それぞれの研究を通じ、それぞれの答えを身をもって示し続けてきたのである。

第2に挙げたいのは、鈴木と奥田の研究を学ぶことを通じて、今日の都市社会学の基礎的な共有財産となっているコミュニティ論について、改めて理解を深められると思われることである。

彼らはそれぞれ異なるスタイルで異なる問題に取り組んでいたが、両者ともコミュニティに焦点をあわせて自身の都市社会学を築き上げていった点では軌を一にしている。いわゆる奥田コミュニティ・モデルは、とくに1970年代以降に広く活発に論じられるようになるコミュニティ論を先導するレファレンスの役割を果たしたし、少し遅れて鈴木が提唱したコミュニティ・モラルとコミュニティ・ノルムの概念は、サーベイ調査による実証研究で活用するのに耐える強力な分析枠組となった。両者とも後年になると都市社会学の枠には収まりきらないように研究関心を展開させているが、それでもその底流にはコミュニティに基礎をおく思考があった。しかしそれでいて、ふたりはコミュニティ概念を用いてかなり異なる議論をしている。鈴木はコミュニティを土着型社会の一原型と捉え、

その調査研究の結果から近代主義の虚妄性を見出していった³⁾。他方で奥田にとっては、コミュニティに着目することは現代都市の先端を解きほぐすための鍵であり、都市コミュニティこそが都市社会学の普遍的な核心概念となるのであった⁴⁾。

都市を社会的に研究しようとするとき、コミュニティが重要になるのは今も変わらない。しかし今日のコミュニティ概念をめぐる状況をみると、社会一般にはますます広く浸透している一方で、学界では議論の最前線からは退いている感がある。ここには思いのほか深いギャップがあるのではなからうか。そのような今であるからこそ、コミュニティ論に再び光をあてることの新しい意義が高まっているといえるのではないだろうか。

第3に挙げたいのは、今日の都市社会学のあり方を梓づける影響力が鈴木と奥田にあったこと、つまりあえて極論すれば、彼らの研究が今日の都市社会学にとっての见えない足枷になっている可能性もあることを、われわれは自覚していくべきではないかと思われることである。

ともに1930年代のはじめに生まれた鈴木と奥田は、日本の都市社会学にとって唯一無二の存在といえる特別な世代に属している。彼らの都市社会学者としての世代経験は、そのすべてが日本都市社会学そのものだったといっても、あながち間違いではないであろう。というのも、彼らが研究者としての道を本格的に歩みはじめた1950年代の後半は、ちょうど都市社会学が一学問分野として急速に立ち上がろうとする時期であった。また、日本都市社会学会の組織化に代表される学問分野としての制度化過程においては、彼らは脂の乗った働き盛りの世代として先頭に立つ役割を果たした。日本の都市社会学の誕生・成長・確立へと至るプロセス——それはやり直すことのできないユニークかつ決定的なプロセスである——は、鈴木・奥田世代の研究者個々人のライフサイクルとほぼ完全に一致している。彼らはキャリアを通じて日本の都市社会学の最前列にいたのである。

いまある日本の都市社会学は、鈴木や奥田らの世代が築き上げ、その子供たちがさまざまな展開を推し進めることで成り立ってきたといえるだろう。もちろん言うまでもなく、さらに新しい世代の研究者が登場してくることも、学問としての一層の発展や変化も、とどまることなく続いていくであろう。だが、日本都市社会学を定義づけてきた鈴木や奥田らの影響は、目に見える面においても潜在的な面においても、今のわれわれが考える都市社会学という学問領域の存在そのものに深く刻み込まれている。その影響はいかなるものであったか。それが今日どのような意味を持つのか。彼らが遺したものを継承しようとするにしても、あるいはそれを克服し乗り越えていこうとするにしても、まずそれらをあらためて検証してみることが求められるであろう。

本特集に収められているふたつの論考について、ここで簡単に紹介しておきたい。

田中重好氏による「鈴木広の都市社会学がめざしたもの——今後の都市社会学の累積的発展に向けて」は、鈴木による都市社会学研究の全体像を描き出した上で、そのなかでも

核となる位置を占めているコミュニティ研究が、いかなる理論的視野を持ち、実証分析の場でどのように展開していったのかを詳細に跡づけている。鈴木はオリジナルなコミュニティ研究を切り開いた。そして、大都市のみに焦点が絞られがちな視点を広く解放させ、地方の日常から「土着」の重要性を見出していったのである。

こうした議論を支えるのは、一般的にいつて都市社会学には「その時々社会が直面する社会現象を、個別の問題意識をもって研究」するにとどまるという傾向があり、その結果として、学問としての継承が十分になされていないのではないか、という田中氏の問題認識である。鈴木の研究は、その時その時においてアクチュアルな問題に取り組みつつも、そこからオリジナルな「都市社会学という「問い」」を見出し発展させていくような、より大きな視野から都市社会学を構想することにつながる懐の深さがあった。田中氏は今後の都市社会学に向けて次のように投げかける。われわれのなすべきことは、鈴木の実績を単に理解し引き継ぐことではなく、むしろ、鈴木のなかに見られる豊かな「「自ら問いをつくる」力」を学ぶことなのだ、と。

玉野和志氏による「グローバリゼーションと都市研究——奥田都市社会学とコミュニティ」は、変化に富んださまざまな研究に取り組んだ奥田にも一貫した核があり、それは都市性に焦点をあてる視点であり、都市コミュニティにおける共生の作法やその社会過程に対する着目であることを指摘している。郊外住宅地、大都市インナーエリア、アジア系外国人、シカゴ学派モノグラフなどと柔軟に研究対象を推移させていったが、それらはいずれも奥田にとってはコミュニティの探究に他ならなかったのである。

このような奥田の確固とした立場は、彼の学問を強靱なものにした一方で、視野の限定や偏りをもたらすことにもなった。奥田はもっぱら眼前の都市で繰り広げられるリアリティの追究に注力した。そのため、海外の研究動向をフォローするときも、グローバリゼーションの研究に取り組むときも、「つねにドメスティックな観点」に立脚することにつながった。それはまた、「都市という場における多様な生の展開に、素朴に関心を向ける」ことのみに留まるような研究の潮流が形成されていくことにもつながったかもしれない。玉野氏は以下のように問いかける。「奥田の都市社会学が、なぜか日本の都市社会学研究をグローバルに位置づける普遍的な議論への回路を結果的に塞いでしまったことを、われわれこそが重く受け止めなければならないのである」と。

鈴木広も奥田道大も、日本の都市社会学が今あるようなかたちを作るのに、きわめて大きな役割を果たした。そのような意味で、ふたりは学史上の重要人物として永く記憶されるべき存在である。しかしそれだけではない。都市社会学のこれからに挑んでいかなければならない私たちの前に、なおも向き合わなければならない「問題」として、ふたりの都市社会学は現在も屹立しているのである。

注

- 1) 本セッションでの討論をふまえて書かれた渡戸（2017）も参照されたい。
- 2) 『日本都市社会学会年報』に見られる日本都市社会学史に関する特集を列举すると、「鈴木栄太郎の都市理論」（第7号、1989年）、「日本都市社会学の系譜と現在性」（第10号、1992年）、「日本都市社会学における「社会調査」の系譜と課題」（第12号、1994年）、「磯村都市社会学の今日的意義」（第16号、1998年）、「戦後日本の都市社会学——回顧と展望」（第20号、2002年）、「都市社会学——軌跡と展望」（第31号、2013年）を数えることができる。
- 3) 鈴木（1986：166-8）は次のように述べている。「コミュニティ概念の中心は社会結合における共同性と地域性であり、それはいうなれば、土着社会の一原型であります。〔略〕総括的にいって、一般に具体的な歴史的な社会現象、ないし社会過程は、土着要素と流動要素の組み合わせ、つまり衝突・協調・併存・競合のプロセスとしてこれを把握しようというのが私の基本的社会把握でして」、「調査の結果として「近代主義」の虚妄性が示唆されたということです。逆にいうと土着の再評価です」。
- 4) 奥田（2006：111）は次のように述べている。「公共空間や公共世界その他のコンセプトが汎用化された分、都市コミュニティのキーワードは後景に退いてきている感がある。日本都市社会学会や地域社会学会レベルでは、都市コミュニティは戦後日本のキーワードの一つとして学史（誌）上に記録されているが、筆者としてはハヤリスタリの用語とは別に、都市コミュニティのモデルじたいの再構築がいま求められている、と思う」。

文献

- 町村敬志，2013，「都市社会学という「問い」の可能性」『日本都市社会学会年報』31：5-20.
- 奥田道大，2006，「都市コミュニティ研究のもう一つ先に——覚え書きノート」，広田康生ほか編『先端都市社会学の地平』ハーベスト社.
- 奥田道大，2009，『人びとにとって「都市的なもの」とは——新都市社会学・序説』ハーベスト社.
- 鈴木 広，1986，『都市化の研究——社会移動とコミュニティ』恒星社厚生閣.
- 鈴木 広，1997，「都市社会学の現代的課題」『久留米大学文学部紀要人間科学科編』11：21-34.
- 渡戸一郎，2017，「奥田都市社会学から何を継承するか」『明星大学社会学研究紀要』37：19-28.

（まつお こういちろう／帝京大学経済学部・教授）